

# 平成 30 年度中小企業診断士 第 2 次筆記試験 全体統括

TAC 中小企業診断士講座  
専任講師 三好 隆宏

## <全体講評>

今年度の 2 次筆記試験は、受験者によりかなり印象が異なるという点に特徴があるようです。共通するのは、多くの受験者が終了後、「すっきりしない」「もやもやする」印象を持っている点です。この点は例年通りです。結果的に約 2 割が合格するという点を前提に考えると、「大事故を連発しなければ合格する」という点も例年通りです。

それぞれの事例について、簡単に特徴を整理してみます。

事例Ⅰは、事例内容が読み取りにくいです。A 社のストーリー（時系列的な推移）が頭に入りにくいため、対応を困難にしています。さらに、問題要求（指示）をはずしやすい問題が複数あり、解答を編集するまで一貫して「指示をはずした解答をしない」手順を採用しないと思わぬ失点につながります。要求は例年どおり「理由」「目的（ねらい）」など複数の結論で解答を構成できるタイプがほとんどですので、無理に結論内容を絞り込まず、否定できない内容であれば、解答に含めておく対応が望ましいです。

事例Ⅱは、これまでと異なり、問題文にひとつも「助言」という表現が使われていません。事例全体として「診断・助言の事例」であることに変わりはないわけですが、解答箇所 4 箇所、字数 450 字と“つくり”もかなり違ってきます。第 1 問の 3C 分析による B 社の現状分析は、「3C 分析の観点」という出題者の意図をよく考えて解答をまとめないと、大きくはずす可能性があります。また、第 2 問、第 3 問がいずれもインバウンド客を対象にしており、「和の風情」に対するニーズ、英語対応、クチコミの要件（「歴史ある街並み、食べ物など写真映え」）、・・・と複数の観点からの根拠を要求（制約）に合わせて対応付けしないとと思わぬ失点につながる可能性があります。

事例Ⅲは、図の読み取りに加え、問題本文中に示された根拠が多く、時間内に上手に対応するためには、「得点しやすい問題から処理する」方針を徹底できたかどうかポイントになります。解答しやすい第 4 問、第 5 問の解答をまず作成し、落ち着いて残りの 3 つを自分にとって処理しやすいものからひとつひとつ処理をする。第 1 問は×になるような問題ではありませんが、80 字以内で編集するのはかなり難しいです。また第 2 問の図 2 は情報量が多いため、まず「問題点を特定する」ことだけに焦点を当てる対応が望まれます。

事例Ⅳは、「問題の理解」ができるかどうかで、大きな差がつく問題構成です。計算処理そのものはかなりシンプルです。問題の分量および処理量がかかなり多いこと、日本語表現的にかかなりわかりにくい問題（第 3 問設問 1）や端数処理の指示が不適切と思われる問題（第 2 問設問 2）などが含まれていたため、80 分間のマネジメント力も重要になります。

一方で、計算処理を伴わない記述のみの問題を含め、記述部分がかかなり多い構成ですので、自分の感覚より得点は高くなっている可能性があります。